宍粟郷土会報
No. 36
45.4.15
兵庫県宍粟郷
山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話②2000

山崎三景さいこの節

安田青風

最上山

鐘はナ
鐘は鳴る鳴るさいこのさいよ
ヨに三度それはえ

最上ナ
最上菩薩のさいこのささいこのさ
ヨ時の鐘それはえ

宍粟橋

其様ナ
其様待つとてさいこのさいよ
橋に来りやそれはえ

其様ナ
其様来もせでさいこのささいこのさ
ヨ瀬のひびきそれはえ

大歳様

藤のナ
藤の宮出てさいこのさいよ
北見ればそれはえ

五十波ナ
五十波生谷さいこのささいこのさ
ヨ潟のけぶりそれはえ

目次

山崎三景さいこの節　安田青風　1
閑斎学の源流と末流　中谷康郎　4
随筆　旗結び　島下八重子　6
揖保川の川魚漁業　宇野正碩　7
山崎藩札について　安井生　9
農村の歌舞伎舞台　11
供出梵鐘の銘　11
本会だより　12

山崎郡是小唄

西は最上　東は愛宕
明けりや日がさす　郡是の工場
揖保のながれの　瀬の瀬のひびき
絶えぬ理想は　繭の糸
クルクルヨイトナ

まはれ小車　索緒ついた
操糸湯ほどよい　工場のひるを
窓にや春風　さくらの花が
はらり散つたよ　枠のうへ
クルクルヨイトナ

河鹿出てなけ　蛍も光れ
夏が来たそな　工場の庭に
繭は新繭　黄金の肌が
むすめお十七　つやつやと
クルクルヨイトナ

二つ玉なら　達磨へまはそ
生皮苧皮巣でも　粗末にやすまい

秋のお月さま　工場の軒に
さらり出て照りや　銀の糸
クルクルヨイトナ

撚をあつめて　わしや括づくり
冬の寒日も　何かなしかろ
糸は絹いと　お国のたから
大和ごころの　ひとすじよ
クルクルヨイトナ

蓼の花

白い蓼の花
白い蓼の花
ハ　しろしろ白い蓼の花
みぞのほとりに
はたけの隅に
そよろ風吹きや
ハ　しろしろ白い蓼の花

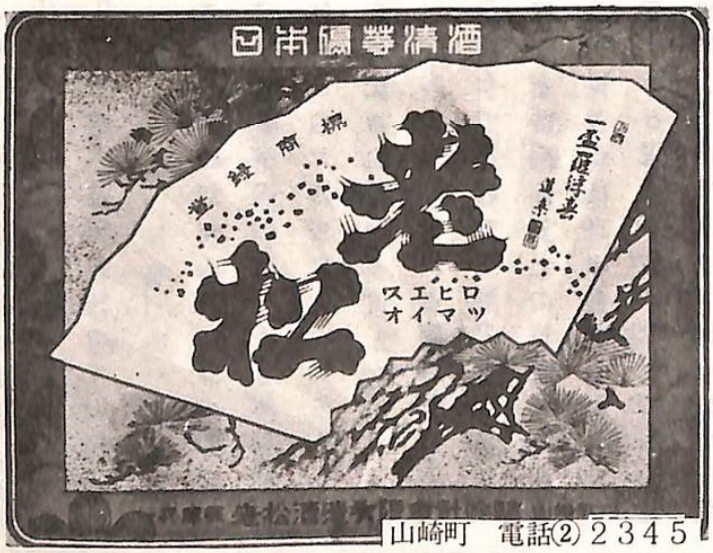
赤い曼珠沙華
赤い曼珠沙華

ハ　あかあか赤い曼珠沙華
薮のおもてに
田んぼのあぜに
とろり日が照りや
ハ　あかあか赤い曼珠沙華

注記＝この作品は、昭和八年か九年頃に作られたものと推定。作者安田青風氏は、当時県立山崎高等女学校の教諭であつた。昭和十二年に退職、豊中市へ転任されるまで、山崎町鹿沢に在住、地方文化の育成に尽力されたことは衆知のとおりである。本作品をあえて転載したのは、昭和初期時代の山崎町を表象する一面を伝え、当時唯一の郡内工場の製糸女工五百名の糸繰り状況を偲び、歳月の変遷を認識して頂きたい。

昨秋「蓼の花」という、桝形十八頁のパンフレット冊子を配布されたが、そのうちの三篇をここに紹介。同冊子の「あとがき」の一部を引用さして頂き、作者の感慨を聞いてもらいませう。

（前略）読みかえしてみるといささか納得しかねる時代感覚のずれなどもあつて、腹立たしい気もしないではないが、あの頃の日本、私どもの気持、それと当時私個人としては本職のかたわら社会教育というか、そういつた面にも多少の関心をもち、現代の公民館などのやつているような仕事を、町の青年有志と共に奉仕するといつた工合で、文化講座やら、児童劇やら、民謡童謡の音楽会などの催し、年一回は児童愛護デーというのを設けて町角などにポスターを貼りまわり、小学生らの旗行列などをもしていたことを思いだした。そんなことから野口雨情さんとも親しくなり、拙宅にも来ていただいたり、中国山脈の中の音水・赤西などという国有林を案内したりなどもした。範囲は、私の勤務先であつた播州竜野・後に山崎。頃は大正の末期から昭和の初期にかけてでそろそろ世の中が物騒になりかけた時であつた。音楽会にはいつも藤井清水氏と権藤円立さんにご苦労願つた。西条八十・中山晋平さんらにも二三度来ていただいた。そんなわけでこの数篇は、その頃



コーセー・資生堂
マックスファクター
アボシヤ化粧品店
山崎町東和通
TEL②〇一一四

の遺失物のような感じで私にはなつかしかつた（後略）

闇斎学の源流と末流

―闇斎と三教一致―

中谷康郎

数年前に高田真治博士の日本儒学史より闇斎の学統を抜萃したが、文語体からの現代文化と、使用文字の判読困難があつて、校正不備のまま掲載された為に支離滅裂の文章に終つたことを深くお詫びしたい。

私は別に闇斎学を研究しているわけではないが、当山崎町に十数年居住しており、多少なりとも儒学を学んだ故に、闇斎学の源流的なもの、またこの学派が、江戸末期の儒学や国家思想に影響を及ぼしたその一端を、私見を混えながら多少の解明をしたいと思う。

前回と同じ高田博士の日本儒学史に

「闇斎は幼時から禅を修め、のち土佐の吸江寺に送られてからもいわゆる儒仏混淆を脱し得ず、入佐後二、三年頃までは三教（神儒仏）一致の思想を持つていた。」とある。

私個人の想像ではあるが、彼の幼時からの禅の教養が朱子学を学ぶに及んで、彼の道学の根本とする居敬窮理の道に入ることを容易ならしめたのではないだろうか。

同書にはまた次のように記されている。

「闇斎の朱子信奉は、その全面的肯定と実践躬行の生活態度とに於て見られる如く、極めて篤実であつたが、その学説の根基は、理気説と敬内義外との二説であつた。闇斎は万有の本体を理となし、気は理に包容され、理気の包容によつて万物を生ずると説くが故に、その所説は万物生成の過程に於て理気二元論であり、気を以て理に包括せしめる点に於て一元論である。倫理説は全く朱子に従い、性を本然の性と気質の性とに分ち、前者は理によつて生じ、後者は気によつて出づるものとなした。その修為の方法としては、格物窮理と居敬慎独との二法によつて、気質の性に蔽われて生じた心の曇を去つて、本然の性を明かにすべしとする復性説を採つたのである。「敬以て内を直くし、義以て外を方にす」とは、元来易経の文句であるが、程伊川は之をその哲学説の中に取入れて「内外を合する道」として深遠な意義を与えている」

闇斎は右に述べたように、中年以後純正朱子学を唱えたが、朱子学説とは、如何なるものかを、右に関連しながら解説しよう。

宇野哲人氏の支那哲学史講話によると、朱子の宇宙論は、周子の太極説と、程伊川の理気二元論を合せたもののようである。周子は宇宙の本体を無極にして大極と云い、その動的方面を陽、静的方面を陰と云い、陰陽の二気から五行即ち水火木金土の五元素を生じ、陰陽五行から万物が生ずると云つている。但し彼は陰陽五行は気だといつているが、太極の何物であるかは明言していない伊川は理気の二元を認め、陰陽二気相交わつて、万物を生じ、二気の相交わるゆえんは即ち理であると云つている。理と気とは相依つて存し、気のない所の理なく、理のない所の気はないが、分つてこれを云えば、理は精神的、気は物質的であるとしている。

朱子は以上の二説を総合して、宇宙の本体を太極と云い、太極を以て理気二元を総合しようと試みた。また朱子の修養論は、全く伊川の説を祖述したものであつた。即ち彼は居敬窮理の二大綱を挙げている。居敬とは、自己の徳性を涵養するゆえんであつて、中庸の尊徳性、孟子の存心養性（心を存し、性を養う）である。窮理とは広くものごとの理を究め知識を広めることで、中庸の道問学（問学に道る。学問に励むこと）、大学の致知格物（物にいたり、知を致す）である。

闇斎学が朱子を忠実に祖述している以上、右の哲学的本体説に立ち、修養法もそのまま踏襲して、初めに記したような学説がなされたことと思う。

従つて彼の学説を要約すると、理気説によつて、凡人の比較的濁つた気質も、居敬等の修養法によつて、清らかな聖人の気質にまで近づけるべきだと説いたと思われる。そしてこの居敬窮理の工夫は、禅に於ける心的工夫と相通ずるものがあるように思われる。

再び日本儒学史に筆をもどすと

「闇斎の純正朱子学が神道と結合して垂加神道の潮流を湧奔せしめたことは、近世儒学史だけではなく、更に広い意味において一大問題を呈出した。（中略）然しその過程において終始その学の中心となつたものは朱子学であつた為に、神道を解するに朱子学を以てすることの多いことは、決して怪しむに足りぬことである。ただ朱子学に対して宗教に等しい教虔の念を払い、その奥を極めた結果は、単に表面的の神儒一致ではなく、その信念に於て深く契合するものがあつた。闇斎は国常立尊または天御中主神を宋儒のいわゆる太極と解し奉り、宇宙万有を化育する主宰者と解釈申上げた。闇斎が天御中主神を太極と解釈し奉つたことは、わが国生成の神話に道徳

的内容を包容せしめたものとして注目に値する。勿論このような解釈は、素行その他の先人に於ても見得るものであるが、垂加神道という一の思想体系を形成し、その門下より多くの思想家を輩出させた所に、その相異が存する。闇斎はまた諸冊二柱の神は、陰陽の理に順つて、人道の起源を為すものとし、天祖は三種の神器を擁して天下を統治し給えるものと考え、ここに宋儒理一分殊の哲学を持来つて一神分れて八百万神となり、天地間の神々は唯一神たる天御中主神の分身であるが、その根基においては同体であるべきことを説いた。かくの如き論は、後世より牽強附会とのそしりを受け、神道の晦冥は、儒者の罪の如く論ぜられるのであるが、儒教に日本人としての生命を吹き込んだ信念意気は、決して軽々に見のがし去ることはできない。」（現代文化中谷）

かくて闇斎の学は、朱子学派と神道学派の二つに分かれたのである。

酒類及飲料一式
鉄屋酒店
山崎町伊沢町
電話②〇一三九

随筆旗結び

大阪　島下八重子

山梨県人の信玄贔屓は昭和四十五年になつても、少しも衰えていない。花の頃、県中の甲冑を集める程の気持で、その昔の陣立て通りの武者行列をするのだそうだ。甲府郊外で町会議員をしている嫁の父から、わざわざ見に来よと案内があつた。それで、諏訪法性のあの白毛の兜が私の生れた土地の隣町安富の加茂神社に秘められてあるそうなと、郷土会誌仕込みの話を伝えると、目を輝やかせて「甲州にも小笠原町というのがある。そこに由縁のある藩主だつたのであろう。」という。「何でも信州から九州へ、そこで分れて播州へ落着かれた家のようですが：：」などと答えてその場は済んだが、小笠原家というのは、私にとつても一寸忘れられないものでもある。一・六九米も身長のある適齢期の娘を持つて、結婚相手があるかしらとひそかに心を悩ませていたとき、三男の恩師が来て下さつて「一・八米を超える長身の青年が嫁探しをしているが見合いをせぬか」とのこと、家柄だけは太鼓判の銀行マンで、母子家庭だがクリスチャンで、永年のロンドン暮らしが身についているから変に干渉し合うこともなく、至つてさらりとした生活振りだと

いう。母君の生家も名の知れた病院である。良過ぎるようである。「不釣合いでもいけませんから」と申上げたが、「奥さんも古いなあ。当人同志の意気が合えばそれでいいじゃありませんか」とおつしやつて引き合わせて下さつた。この娘ならと先方もおつしやつて下さり、娘も嫁つていいという。ところがだんだん聞いてゆくと、姉上が小笠原子爵へ嫁して居られるという。「それは大変だ。」私は一ぺんに逃げ腰になつてしまつた。というのも、旧華族に嫁している主人の再従妹から、島津様がどうの、常盤会がどうのと、所謂上流社会の事大主義のうるささを時折聞かされていたからである。「何だ。大阪の小商人の娘か」と本質などそつちのけで鼻であしらわれるようなことがあつたら阿保らしい。恩師の話だからと耳を傾けていた三男も「やめとけ、交際し切れんぞ」と断固として云いだした。度々御足労下さつた先生には悪かつたけれども、娘も周囲の声を参考に遂にお断りした。「華族アレルギーやな」と主人だけが超然とした顔付きで笑つた。

物知らずの私は小笠原子爵とはどこの大藩かと思つていたら、後日安志の殿様と聞いて、ひとりでに口許がほころびた。ふるさとの隣の町のお殿様：：つながりそうで切れただけにほのかに甘い味がする。

そして思い出すのは山崎の本多様、そこの客人の松平みどり様に私は初めて裁縫を習つたのだ。「天長節などに学校の御門の前に、こう国旗の竿が交叉していましよう。糸もその×印のように組み合わして、一方にくるりとかけ、片方を押さえる。そしてこうきゆつとしめる。よろしいね。これが旗結び」と教えて下さつた白い細い指、高貴な鼻、お風邪を召したら白絹を首に巻かれたことさえ、あざやかに思い出されて、まこと水仙の香のこもつているような人だつた。「松平のお爺さん」とお呼びしていたお髭の白いお方の面影も、日に幾度かする旗結びの折々に、ふつとしのばれるのもなつかしい。兄上春樹さんの絵と共に、みどり様もどこかで清らかに息づいていらつしやるのであろうか。遠い日の思い出される旗結びではある。

揖保川の川魚漁業

宇野　正碌

揖保川の鮎は名高くて最近は日曜日など遠く阪神方面からも釣を楽しむ人が多く、竿を垂らしている姿が見うけられるようになつて殊に西五十波の揖保川筋には友釣りの特設漁場というのが設けられ、その付近は釣天狗の集中地区になつているようだ。

筆者の少年時代には五十波の「エンノイワ」という淵

サンヨーバラチェン
宍粟電化ハウス
山崎町中央商店街
電話 ②〇七八七

の上手に「簗」というものがあつて、鮎を買いに行かされたことを覚えているが、いつの頃にか取り毀されてしまつた。

「簗」というのは、両岸から下流方向にむけて石などで川を斜めに堰いて、両方の堰の出合うところに青竹を編んだ棚を（下流部高く）組み、河水がその中を流れるようにして、竹棚（斜めの）の上は更に編目の細かい簀の子が敷いてあり、洪水時に流れる濁水と共に海に向う鮎、その他を獲るようにしたもので、かなり大がかりのものであつた。

聞くところでは洪水時の流水を早め田畠の被害をなくするため、とり止めになつたらしい。こうして漁獲法も変化すると共に、魚族保護の立場からであろうが川漁も入漁料を払わねばできなくなつてしまつた。

これはだんだん世の中がセチガラクなつたからで昔は魚も多かつたしするから、うんと自由に川の獲物がとれたのではなかろうかと思つている人もあるかも知れないが、どうして案に相違してむつかしかつた。

「例年四月中、山方御役所より川筋村々え殺生つかまり候ものは殺生札請取るべし。若し無札にて殺生致し候ものこれあり、隠し置くにおいては吟味の上、村役人までも越度たるべし」というわけで、東出石にあつた山方役所が筋違いの川漁のことも支配したのです。山方役所は幕府の出先機関ですから、今でいえば、国の（建設省）支配にあつたことになる。今ならば揖保川漁業協同組合が発行する鑑札同様、山方役所が発行する殺生札（鑑札）＝をもたねば密漁の取扱となり、庄屋さまで処分されたわけだ。

密漁の監督に当つたのは、山方役所の下級役人が夏になると時々揖保川筋を巡回したというが、昔も今も似たようなことがあつたものです。

川漁で運上銀を支払わねばならぬのは次のような種類であつた（安政頃）

簗一壱ケ所につき一銀八匁。これを最高にして投網一壱ケ所一同六匁。さがり壱口弐匁、さで壱柄に壱匁五分の四種あり、この当時米壱石八十匁位ですから、簗で米壱斗程度となります。

専門の漁師の数を発行された鑑札からみると、投網漁＝二十五人、簗＝十五ケ所、さで漁＝十五人、さがり漁

十五人、築の場合は個人ではなく、何人かで組がつくられていたと考へるべきではないだろうか。築についていえば、現在の比地がホキを廻つた、宇原井堰の南魔手岩下流には、本多侯のものがあつたようで、この附近の川筋は、上香山村と、宇原村との境が明確でなく、元禄頃に争論があり、宇原井堰より南で百三拾五間は香山村（本多侯の築はそのまま）のものとなつた事件があつた。

さがり漁というのは、女竹を編んで長さ一間程の円錐状のものをつくり、太い部分には更に漏斗状の口をつけ、秋口に川を下る魚、カニを獲つたもので、横筌或いはモンドリというものと同じものかと思います。

さて漁とは、二本の太い竹竿を又状に先を広くし、その広い部分に網を張つた、洪水時に、ゆるい流れのところにあつまつた魚をすくい上げる網のことではないかと思うが他にも、いくつかの種類があつたかも知れない。

竿と糸を用いて釣る漁には税金がなかつたようで、農民は、余暇をみて、この方法で蛋白質を補給したのであろう。

宍粟郡以外では竜野には鵜匠が居て鮎をとつていたこともあつた。又、三方谷方面では、鮎、鱒、うなぎ、桜魚もとれたようだ。（宇野）

山崎藩札について

安井　正生

寛文元年（一六六一年）越前福井藩が初めて銀札を発行したと称されている。その後、各藩でぞくぞく発行された。幕府も一時禁止したりしたが、財政難の各藩事情無視できず全国的に発行されるようになつた。本多家の当山崎藩も左記のとおり発行されたとのことだが、現在では中々御目にかかれない。山崎町郷土館に展示されているのは、約十種程度である。

次に勘定元と発行年月および種類を掲げる。

山崎町　文政元年五月

銀札　一匁、三分、一分

銭札　一匁、三分、二分、一分

町会所　文政元年五月

銀札　十匁、五匁、一匁、二分、一分

油屋棟屋門前屋　右同

弁当と仕出し　きくや
山崎町戎神社南
電話②一一九九

銭札　一匁、二匁、一分、五厘、十匁

油屋、門前屋　文政六年五月

銭札　三分、一分

本町会所　天保七年

銭札　百目、五十目、二十目、十匁、五匁、

一匁、五分、二分、一分、五厘

元小屋鉄山所

銀札　一匁、一分、五厘、八厘

年番年寄　天保四年

銭札　一匁、五分、三分、二分、一分、五厘

同　弘化四年

銀札　一匁

銀会所　弘化四年正月

銀札　一匁、五分、三分、二分

年番年寄　弘化二年三月

銀札　五十目、二十目、十匁、書札

金穀役所　天保八年十二月

まじま食料品店

山崎町伊沢町

電話②〇四六七

②二〇一五

銀札　二百目、書札

市場通用

銀札　一匁、五分、一分、五厘

御料所　安政三年三月

銀札　一匁、三分、二分、一分、五厘

産物会所　安政四年十二月限

銭札　百目、五十目、三十目、十匁、五匁、

一匁、青札

生産所　同　年

銭札　五十目、五匁、赤札、百文

小村屋彦七　明治元年十二月

金札　一両、一分、一朱

炭元場勘定会所

銭札　一匁

明治四年七月廃藩置県になつたときに、藩札は勿論政府の負債となつた。当時の山崎藩の銭札流通高は、八、六七八円三五七厘と記録されている。安志藩は一四、三〇七円四六七厘である。そこで明治新貨との換算はどうなつていたか。山崎藩では、金一両につき銭札八百目、銭札一匁に付銭十五文で、銭札換算表は次のとおり。

百　匁	十二銭五厘
五十目	六銭二厘
二十目	二銭五厘
十　匁	一銭二厘

五　匁　　六　厘
一　匁　　一　厘
五　分（以　二枚）　一　厘
一　分（以　八枚）　一　厘
五　厘（以十六枚）　一　厘

明治四年五月十日に新貨条例公布されて両を改めて円銭、厘の単位を確立したのでこれに基準したもの・当時の物価の参考までに、明治四年十一月名古屋新聞所載の物価を引用する。

一円で買えるもの―米二斗九升、麦二斗八升、塩四二貫、味噌一二貫五百匁、油二升五合、酒一斗、炭三〇貫白砂糖七斤半などで、みかん一箱三三弐、ごまめ一升五弐五厘、数の子一升八弐等々となつている。（当時の名古屋の相場）

農村歌舞伎舞台

―県指定文化財―

昭和四十四年度の県指定文化財は、三月二十七日兵庫県教育委員会で決定発表された・建造物十一件、民俗資料五件、彫刻、工芸、史跡、天然記念物、無形文化財各三件、名勝一件で計三十二件ある。この内、本郡内のもの民俗資料で千種町の農村歌舞伎舞台と史跡で、千種町の高保木たたら遺跡の二つがある。

農村歌舞伎舞台―宍粟郡千種町河呂、大森神社境内所在のもので、入母屋造り茅ぶき建物、間口十米、奥行九米（約二十七坪）の大きさ、奈落式の楽屋、さら廻し式の回り舞台、分解式花道などの特徴を持つ典型的農村舞台で、その設備、構造などがよく保存されており、江戸時代末期のものと推定されている。

高保木たたら遺跡―宍粟郡千種町西河内字高保木所在の製鉄所あとである。千種鉄の有名であることは今更ら言う必要もないが、この土地は昭和四十三年三月日本考古学会の肝入りで新事実を発見。地表面下約三十糎に傾斜と直方向に古い炉材を積み、その高い面との間に毛細管現象による地下水を防ぐためその上に炉床を張り、西洋式風呂様のたたらを築いて製鉄を行つたもので、この特殊装置が明かにされたもの。露天及び屋内の両方たたら跡ありて、古代製鉄史上の貴重な資料と云われている。

供出梵鐘の銘(一)

戦時中供出させられた山崎町内各寺院の鐘の銘の写し

不動産の御用命は
山本不動産へ
責任者　山本文治郎
電話　②〇三五二

が見つかつたので余白をかりて順次掲載さして頂きます

大　雲　寺

播州宍粟郡山崎郷青竜山大雲寺者、吉水之末流、鎮西之餘風念仏三昧道場也。開山称蓮社専誉上人者、俗姓号千葉兵庫介将胤、下総国佐倉於清光寺得度、有所以開基当時、往年当院以無洪鐘中興曇祖天誉上人為願愛新鋳一鐘欲令近里遠村覚煩悩長夜眠勧念仏講衆化十方緇素以元禄七歳次甲戌天息鐘就寔曇祖之功為脩然其音響不応宮不調以為一憂経大七年星霜至予宝誉代有信心檀越重尤於直鋳故応信願強不労諸人之施財立地梵鐘就且夫実際現地雖無一物仏事門中用蒲竿為曇之根門開雖無推塞此界風輪之所成故耳根最利故用音声以為仏事隔垣聴音響避通俱可聞是則円通法門上求菩提下化衆生方便豈非此等鯨哉仰視伏冀信心檀越福寿無量結縁　白於万歳伝子孫共成仏道銘曰

能仁化穢　声塵為光三慧自然得悟正円
清竜頭上　大雲婆娑不背鳴玉如意昔王
華曇日暮　覚夢驚眠移魂浄城託質無違
降伏魔外　四海安全緇永久其功萬年
惟時享保五歳次庚子春三月吉祥日
当時九世
相蓮社実誉不改叟謹誌

本会だより

本会の春季見学旅行は、来る五月十日岡山県方面に計画しています。別紙案内書御覧の上御協力下さい。

本会総会報告

昭和四十五年一月十二日長生会館に於て総会開催、事業報告及び会計報告をなし、その承認をえて、役員任期満了による改選をなし左の者就任しましたので御報告します。

会　長　井口光司
副会長　庄　和夫　安井寅一
幹　事　入江静夫　前野四郎
三木金之助　志水富治
志水新次郎　岸本　正
田中　稔　安井俊二
福井政男　堀口春夫
福井詫次　山本久治
織金政一　千本　治
田中実太郎　田中義弘
下村憲一　西上忠男

書籍・雑誌・文具
美術額類
トクサヤ書店
山崎町山田町
電話　②〇〇六七